
十月十日 I N異世界

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十月十日IN異世界

【Nコード】

N9624Y

【作者名】

椋

【あらすじ】

このお話は、異世界に迷い込んだ少女が、歳の差・体格差のある旦那様へ嫁ぎ、全ての人に勘違いされながらも楽しくマイライフを生きるという、作者のとある日に浮かんだ妄想・空想を元に執筆されております。

一話

「こわい、こわいの……」

怯えたように後ずさるあたしを見て、痛ましげにその瞳を伏せる男とメイド多数。

「……リリイ、すまない。にをはこびだせっ」

小さく謝罪を口にした男は、それでもこれ以上の逃亡生活を許す気はないらしい。

一言命じられて、壁際に控え顔を伏せていたメイドや使用人たちは、火急的速やかにあたしの小さな隠れ家から少ない荷物をさらに小さくして広げられた大きな布に包み運び出す。

「……こ、わい」

そう呟きながら、ああ……これであたしの心穏やかだった日々も終わりか、と諦めの籠った何ともやるせない気持ちのまま思い返せば、本当にあたしの人生は波乱万丈だな。

――始まりは三年前、何が原因かなんてことはいまだに解明に到っていないけれど……あたしは異世界へと迷い込んだ。気が付けば見知らぬ路地裏にいて、言葉も通じず、何より生き物のサイズが大違いも良い所だった。人……なのだ。それは間違いないと思う。でも、これは無いだろう？と顔も知らぬ神に問いかけたくなるほど、彼らは大きかった。どんなに背伸びをしても、あたしの身長はこの世界の平均の人間の腰くらいしかない。話しかけようにも彼

らの言葉はまるで、そう……例えるならノイズの様にざらざらと耳障りな音でしかなく。

何度泣いただろう、何度声を囁らしたか覚えてもない。……十五の秋、あたしは世界を超えた。

それから半年もの間路地裏を彷徨い、結果生きるためゴミも漁ったし、お風呂なんて夢の中でしか堪能できない日々を送り、立派なホームレス……と言えば聞こえは可愛いけれど、そう、小汚い浮浪者へと成り果てたのである。

そして今から二年と半年前、あの日、あたしはその小ささゆえか幼い顔立ちが目に残まったのかは分からないけれど、半年もの間小汚い孤児としか見られていなかったはずが奴隷商人へと捕まり、目隠しと手かせをされて乱暴にどこかへ連れ去られた挙句、数週間もの間、陽の入らないじめじめした場所へと閉じ込められた。

ぴちゃん……と、どこから響く水の滴る音。地面に転がされ目隠し状態のまま、どれほどの時間が経過したのか。容赦なく縛られたままの手足は血が通っていないのか、感覚もない。本当に、死にたいと思った。ここへ迷い込んで、何度も帰りたいと泣いたけれど、所詮異世界なのだ。あたしがどれほど泣こうが、気にする者は一人もない。心配してくれる母も父も兄も弟もペットの犬も……親友も。あたしの嘆きも悲しみも、届きはしない。……だから、もういつそ死んでしまえば、そう、考えてしまうほどには、心も体も、疲れていたのだ。

けれどあの時、目隠しの布の端に光が差し込んだのだ。ゆらゆらと揺れる蠟燭の光。奴隷商が来たのかと身体を強張らせたあたしの耳元で、突然、あのノイズのような聞き取れない音が響き、お恥ず

かしながらも人生で初、極度の疲労ととてもない恐怖により気を失った。

そして目を覚ませば、これまた見知らぬ男の家で、それもふかふかの柔らかか高級ベットへ寝かされていて。ふえ？って飛び起きましたよ、そりゃね。でもまあ、悪いようにはされず保護されたらしいことを、言葉は通じなくとも感じ取ったあたしは大人しく療養した。だって、言葉が通じない以上いつなんどき放り出されるか分かったもんじゃないでしょ？だから出された食事はそれこそお腹が裂けるんじゃないかってくらいパンパンになるまで食べて、お風呂だって日本にいた頃はいつでも入れたからそこまで真剣に入浴した事もなかったけど、肌が紅くなるくらいごしごし擦って温かなお湯にもものぼせるほどじっくりと浸かって今の幸せを堪能していた。

そして、何よりもこの穏やかな生活の中で一番助かったのは言語教育！二年半経ってもまだ子供の様にひらがな言葉しか喋れないけど、それでも簡単な単語なら理解できる。初めて理解できたとき、感動して泣いてしまったほど。他人と意思疎通が出来ると言うのは、本当に人間には必要不可欠で、心身共に安心感を与えるものだなあなんて実感できた出来事だった。

そして、やっと幸せになれたはずのあたしが、今現在何故怯えているのか……。

それは、いくら簡単な言葉がわかるようになったと言ってもそれは所詮ひらがな単語。難しい単語や言葉、会話など高レベルなことなど無理だったのに……勝手に勘違いしたこちらの世界での保護者によって、大恥をかかされ、それによって湧き出したとてもつもない羞恥と怒りが噴火して、あたしが家出。まあ、結局は隠れ家も見つかってしまい今連れ戻されているわけだけど、でも元々悪いのはあの人なんだから……ああもうっ！思い出すだけでも恥ずかし

ぎて泣きたくなるっの!!

二話

***ドロー・キルシュ・ノールブルク

「……すまない、リリィ。荷を運び出せっ」

怯え、後ずさる黒髪の女性……。一見した者にはその幼い容姿から彼女が実は成人していて、しかも既婚者だとは信じられまい。そう……世界でも貴重な、黒を身に宿す彼女は、

「ノールブルグ副団長、失礼なことをお聞きしますが……」

その時、儂の部下で医療術者のナースが聞きずらそうに瞳を伏せて問いかけてきた。

「構わん、続けろ」

「……奥方はなぜ、夫である副団長を見てなお、あのように怯えられていらっしゃるので御座いましょう？」

……そんなことは、儂が聞きたい。リリィは、二年半前に奴隷商の穴倉を一齐包囲し摘発した際に初めて出会った。彼女は奴隷商に捕まり、長い間牢に転がされていたらしく衰弱も激しかったようで、初め王国医術院で保護されるはずが、なぜか彼女を助け抱き上げたままだった儂の服を握りしめて離さなかったため……儂の屋敷へと運び込まれた。そして定期的に王国お墨付きの医療術者が屋敷へと彼女の様子を診に足を運んでいたのだが、その容姿から以前の大戦で被害にあい絶滅したと噂されていた国境に集落を置く少数民族……

：黒の一族の生き残りだろうと断定され、以来王国保護指定され、国より多大な援助を受けている。

心身の疲労により深い眠りについていた彼女が目を覚ましたその時、儂等は一族の絶滅から数年の時をどう生きていたのか、少しづつでも何かを聞ければと思っていた。しかし、目が覚めた彼女は言葉無くし、ただ身体を生かすと言う意味でだけ食事をし、風呂へ入り、深く眠った。

儂は、王宮騎士団副団長と言う重責故日々忙しく、彼女に目を向ける時間を取ろうともせずに半年が過ぎた。そして半年経ち仕事もやっと落ち着いてきた冬頃の事だったか。彼女の世話を任せていたはずのメイドたちから、彼女は保護されてから一度も笑顔を見せないのだと相談を受け。その相談をふむふむ、と大人しく聞いていた儂は最終的に何がいけなかったのか……旦那様は一度も見舞いにすら訪れずお可哀想だとは思いにならぬのですかっ?! これではまだ年若い彼女があまりにも不憫すぎます!! と抗議まがいの説教まで受けてしまった。

……そうだ、それで儂は彼女の部屋まで出向き、何の反応も示さない彼女の能面のような表情を前に語りかけ続けた。時には幼児用の絵本を読み聞かせ、時には儂の若い頃の失敗談を、そして、いかにメイドたちが彼女を心配しているのか。そうして二月が過ぎ、ふたつき半年が過ぎ、一年が過ぎた頃……話す事が出来なかった彼女が少しずつ変わっていった。可愛らしく微笑むようになり、二人、馬で遠乗りにも出かけるまでに回復し、自然彼女との距離は縮まり、儂はこの年になって初めて宝石店で女性物の小さな指輪を買った。そして、結果……年甲斐もなく婚姻まで至ったと言うわけだ。

まあ、リリィは儂の腰ほどこしか身長もなく、夫婦として見られる

こともなかなか難しいが、今となっては惚気る良い話のネタだ。

「リリイ、いったい何があったと言うのだ。どうして勝手に屋敷を出て行った？」

震え、壁際のベットの端まで後退り顔を伏せた彼女の傍へ膝をつき、優しく声をかける。

「こ、わい……いや」

未だ片言の単語しか口にすることが出来ない彼女は、小さな赤い唇を震わせて、小鳥のようにか細い声で何かに怯えているのだと儂へ告げた。

「怖い、か。ふむ……リリイ、わしはだれだ？」

彼女が屋敷を飛び出す前は、言葉遊びの様に良く口にしたものだ。

「わ、しは、だれ？わ、しは、りりいのすきなひと」

たどたどしく、あの頃のように言葉をなぞり問いを返す彼女に、安心するよう大げさに微笑み

「そうだ！儂はリリイの好いた男だ。儂ほど強い男はどこを探そうともそうはおらんぞ？何を不安がるのだ？」

「す、きな……ひと」

リリイは儂の張られた声にびくり、と顔を上げ、そして甘い声で儂を見つめそう言葉を零した。

「帰ろう、儂等の家へ」

「い、え……にっ？」

彼女が答えを出す前に、ころりころりと言葉を舌の上で転がしている様子を見て、儂は彼女を大きなシーツに包み抱き上げた。

「ナーズ、すまないが後は頼む」

「……今日付き合わされた全員を後日酒場へ連れて行くとお約束頂けるのなら」

「……ふんっ」

しっかりしとるわい。まあ、行方不明になった少数民族の生き残り、しかも王宮騎士団副団長の奥方の肩書を持つリリィを搜索すると言う大義名分を掲げていても最終的には夫婦喧嘩に巻き込まれたような形になってしまったしな。部下に奢るのも上官の務めだ、致し方ないとするか。

三話

「リリィ、いったい何があったと言うのだ。どうして勝手に屋敷を出て行った？」

あたしが怒りに震え、それ以上近づくなオーラを放っても……この人に通用しないのはもう二年以上一緒に暮らしてよく！理解してはいるけどもっ！！

「こ、わい……いや」

まあ、怒っているあたしを宥める為にベットの端に膝をついたままでは良い手だと思うわ。そんな風に優しくされて悪い気分になる女性はないんじゃないでしょうし。でもこの人は、あたしが難しい話し言葉を苦手としていることを知っているはずなのに……なぜ早口で語りかけるの？名前を呼ばれたのは聞き取れたけど、そのあとなんて言ってたのか全然理解できないっの！！

……一応、今の会話成立してませんよ？と気づいて貰う為に「早口で怖いんですけど！」とこちらの言葉に置き換えて口にしてみたものの。

「怖い、か。ふむ……リリィ、わしはだれだ？」

ああ、そうですよね？……全然通じてさえないらしい。あげく、お屋敷で言葉の勉強の為に良くこの人に出されていた問題をこの場にて披露してしまった……騎士さんやメイドさんの沢山いる狭い部屋の中で。十八にもなってこんな幼稚な言葉遊びしていたのが、公の場で暴露されてしまった！！

なんて恥ずかしい……しかし、この問題に答えないことで更なる羞恥にさらされるのはもう勘弁なので

「わ、しは、だれ？わ、しは、りりいのすきなひと」

……ええ、分かっていますとも！！公衆の面前で告白して、お前は十八にもなって恥ずかしくないのかって？！ううう、恥ずかしいですともっ！！けどそれもこれも、これ以上の恥をかかないため！一時の恥はかき捨てます！！

「そうだ！儂はリリィの好いた男だ。儂ほど強い男はどこを探そうともそうはおらんぞ？何を不安がるのだ？」

もうやめてっ！！そう叫べたらどんなに救われるだろう……。奥手代表である生粋の日本人としては、この世界の大っぴらな愛とスキシップに耐えうる心も体も持ち合わせちゃいないんですよ！！

「す、きな……ひと」

嫌いじゃないですよ？本当はとても「すきなひと」だけれど！！今現在あなたのもっとも大事な人は？とか問われれば……今となつては瞳を閉じても瞼の裏に浮かび上がる最愛の夫、だけど！！でもやっぱり恥ずかしいものは恥ずかしいんです！！

「帰ろう、儂等の家へ」

ええっ、もう「いえに」帰るんですか？でもまだ貴方にかかされた大恥について、どうやって仕返しするか考えていないんですけっつ？！

「い、え……にっ？」

なんて、言葉が分からない分心の中でたくさん返事を返している間に……気が付けばさわり心地の良い真っ白シーツに包まれて、愛する夫の分厚い胸板と太い腕に抱き上げられ、帰途に着いておりましたとき。

そして数週間ぶりに帰った我が家では、あたし付きのメイドや執事さん、料理人の皆さんに散々叱られて甘やかされるのです。

四話

****ドーラ・キルシュ・ノールブルク視点

「荷は全て積み終えたか？」

愛妻であるリリィをその腕にしっかりと抱き、彼女が隠れ住んでいた小さな木造の家を出た。そして周囲を見渡せばすでに人だかりが……。

そうだ、ここは農等の屋敷がある貴族層の土地ではないと言うのに、突然このような平民層の家々が立ち並ぶ土地に騎士やメイドが駆けつけ、この家がある道の先、大通りには我がノールブルグ家の印が焼かれた馬車まで止まっているとあって噂付きの人々が集まり始めていた。

「荷は積み終えましたが、この人の多さでは……馬車へたどり着くにも一苦勞です」

本来ならば、リリィの顔を見られぬよう家のドア前に馬車をつけ、素早く乗り込み帰途に着く予定だったのだが。この辺は狭く、馬車がこちらまで入ってこられぬため、自分の足で人だかりをかき分け歩くしかない。

「全くだ、まあ良い。リリィは小さいからの、こうしてシートに包まり農のような巨体が抱き上げれば顔など見えやせんだろう」

部下たちよりも頭一つ高い所から、農はそう告げ足を踏み出した。ざっざっ、と農を囲むように配置につく部下とメイドたち。

「ご主人様、奥方様のご様子は……」

歩き出す儂の背後から問うその声は、リリィへ付けたメイドの一人……名はユーユと言ったか。

「今は眠っているようだ。きっと、疲れているのだろう……」

ちらりと白いシーツの隙間から見える美しい黒髪は、すうすうと規則正しく上下している。その穏やかな呼吸を腕に感じ、ああ、先ほどの怯えは儂へ向けられていたわけではないのだと、ほっと胸を撫で下ろす。

そしてふ、と考えてしまう……。もし、万が一彼女が儂を恐れ、あの美しい漆黒の瞳から涙を流すようなことがあれば……と、己のもつとも恐れる妄想へ取りつかれかけたその時

「ドーラ様、御足もとにお気を付け下さりませ」

ノールブルグ家の執事長であるジャオが深みのある低い声でそつと注意を呼びかけ、はっと俯き気味であった顔を上げれば……目の前には見慣れた我が家の印が焼かれた馬車が。

「……ああ、少し、物思いに耽りすぎたようだな」

儂の腕の中、身動き一つせずに眠り続けるリリィを見つめ……。つい三年前の儂であれば、五十を過ぎてなお鍛錬や戦しか知らぬ自分が、まさかこの先、こんなにも心揺れる相手に出会うなど、妻として迎え入れるなど、考えも及ばなかったであろう……と思い返す。婚姻が決まった頃は年老いた初老の男が今更、と噂され、酷い言葉を投げつけられたことも一度や二度ではない。それでも儂は、一度この腕に抱き恋した愛しい女性ひとを手放すことが出来ず……恥も外聞

も投げ捨て、やっと手に入れた妻を失う恐怖に、こんなにも動揺し怯える夫を知ったなら、リリィは何を思うのだろうか？

「皆、今日は良く働いてくれた。後日浴びるほどの酒を贈らせてもらおう」

腕には愛する人を抱き、そんなことを考えているとは思えもつきもしないだろう部下へそう告げ、儂は馬車へと乗り込んだ。

がたん、ごとん、がたん、ごとん

屋敷へと走り出した馬車の御者台には執事のジャオと御者兼馬小屋世話人のリヤク。馬車内部には、儂とリリイ、そしてリリイ付きメイドのユーユとメイド長のマリアンが同席している。

「ご主人様、このような場で差し出がましいことを申しますが……奥方様は、やはり例の件が御嫌でいらしたのでは」

数分か、数十分か、誰も口を利かず、深々と静まり返っていた室内に、彼女には似合わぬ弱弱しい小声でそう進言したのは……メイド長であるマリアンであった。

「マリー様……そのようなこと」

マリアンのその一言は王宮を、ひいては王族を非難したと取られてもおかしくはない内容である。まだ年若いユーユでも、その言葉に同意すると言うことがどういう事態へと繋がるのか瞬時に理解出来たらしい。青褪め、そわそわと小窓を気にし始める彼女だが、走り出した馬車の中で交わされる会話など誰の耳に入ろうか。

そして、言葉では否定していても、徐々に俯くユーユの悲しみに暮れるその表情を見れば、誰でも彼女が本当のところどう思っているのかくらい想像がつくと言うものだ。

「……ユーユ、貴方はまだ若く経験も浅い。使える主人が自室から居られなくなられた事態に気づくのが遅れるなど、本来ならば有ってはならぬ大問題です。今回は奥方様の置手紙も見つかり、無事保護も終え、旦那様の寛大なご処置でお許しを頂けたとはいえ、次はないものと思いなさい」

「……は、はい」

マリアンは彼女の言葉など聞いてはいないとばかりに厳しい声音でユーユへ告げると

「此度の件を、旦那様はどうお思いでございましたか？」

くるりと首の向きを変え、続けて儂へと問うてきた。

「……ふむ、そうじゃなあ」

マリアンとユーユの視線を感じつつ、リリイにかかるシーツを少しずらし、いつ見てもまるで濡れているかのようにつやつやと輝くその髪を梳き、額へと口づける。

「確かに、リリイは黒の一族唯一の生き残りであるが故に、子をなさねばならぬ。……まったく、医療院の連中にも困ったものだ。^{はじめ}最初は、ただ衰弱したリリイの治療の為だと申しておった言うのに、儂と婚姻を結んだとたん、今度は子を望むか……」

髪を梳いていた手のひらを、今度はリリイの頬へを滑らせる。

「旦那様、それでは奥方様があんまりにお可哀想ではございませんか……！この国の戦の為、血縁者全てを亡くされて、食べる物も住む場所も、言葉や笑顔さえ、何もかもを奪われたと言うのに……！今度はいまだ存在さえしていない赤子まで奪おうと言うのですか……！？」

マリアンは普段見せない感情的な眼で儂を睨み、ユーユはその隣で瞳を潤ませ、唇を噛んでいた。

「そう興奮するな、リリイが起きる」

「つ……私は、先ほど、怯える奥方様を拝見した際、肝が冷えま
した。まるで、初めてお屋敷へお越しになられたあの頃へ、奥方様
の御心が戻ってしまわれたのでは、と」

そう声音を押さえ話すマリイの細い腕の先、膝へ重ねられた指先
は小刻みに震えていた。

「……王宮医療院へは使いをやろう。暫く顔を出すな、と。どち
らにせよ、此度の件についてリリイと
良く話し合わねばならぬし……彼女が落ち着きを取り戻し、子に
ついて考える余裕が出てくるまで」

体調については問題ない。あの頃のように常に医師を必要としてい
るわけでもない。医師団が月に何度も屋敷へ訪れる必要も感じられ
ぬ。リリイの笑顔を曇らせる奴らなど、いっそ二度と顔を出さねば
良いものを！

「……どお、ら」

物騒なことを考えたせいか、腕に力でも籠ってしまったのか。瞳
を開く様子もないリリイが愚図るように、舌足らずな言葉で無防備
にも名を呼ぶもので、つい誘惑に駆られ、マリアンやユーユがいる
ことも忘れた儂は、最愛の妻へとそっと、心からの愛を込め、口づ
けを落とした。

「リリイ、愛している」

だから、どうかこの先、彼女が儂から離れることのないよう……。
そう、祈りながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9624y/>

十月十日 I N 異世界

2011年12月3日02時47分発行